

高知大学 病院 ニュース

〔編集〕

高知大学病院ニュース

編集委員会

委員長 山本 哲也

〔発行人〕

高知大学医学部附属病院

病院長 杉浦 哲朗

平成25年度 医学部附属病院 年度計画概要

—— 附属病院に関する目標を達成するための措置 ——

高知大学は、第二期中期目標として『人と環境が調和のとれた共生関係を保ちながら持続可能な社会の構築を志向する「環境・人類共生」(以下「環・人共生」)の精神に立脚し、地域を基盤とした総合大学として教育研究活動を展開する。教育では、普遍的で幅広い教養を持った専門職業人を養成する。研究では、南国土佐を中心とした東南アジアから日本にかけての黒潮の影響を受ける地域、すなわち黒潮流域圏の特性を活かした多様な学術研究を推進する。もって地域社会の課題解決を図り、その成果を国際社会に発信する。』を掲げています。これに対する年度毎の実施予定として年度計画を立てており、以下が附属病院における平成25年度の計画です。

1. 社会ニーズに呼応した病院機能・運営を強化するため、1)本院のクオリティ・インディケータ(診療の質指標)の測定とホームページ等による社会への公表、2)感染対策、医療安全、栄養管理、褥瘡対策、創傷・失禁ケアに重点を置いた病院運営を実現する。

これらを実現するため、クオリティ・インディケータ数とその向上度で医療の質と安全を可視化し、本院の感染対策、医療安全、栄養管理、褥瘡対策、創傷・失禁ケアに関して外部評価を受ける。【42】

- 1)クオリティ・インディケータの評価を実施し、DPCデータから得られる病院指標とともに公開を推進する。
- 2)国立大学間相互チェック等の結果に基づき、医療安全・質の向上及び感染対策に向けた取組の改善を図る。

2. 国立大学病院の在り方として単なる経済学的な経営効率ではなく、1)公共的価値(地域、県民の満足)と経営効率の両立、2)病院機能の「品質」の向上のため、公益性と病院収益を両立させた経営効率を実現し、満足度調査指数の向上と経営状況指標の動向で評価する。病院機能の「品質」に関しては、人的資源を適正配置し、コンプライアンス(法令遵守)の精神やセキュリティを高め、ISO9001を更新し、術前外来件数、自己血輸血実施率など医療の安全に資する評価指標を向上させる。【43】

- 1)患者満足度調査のデータを基にしたこれまでの改善及びその効果について中間評価を行う。
- 2)先端医療に係る診療の実現に向け、先端医療の充実を図る。
- 3)臨床検査室が認定取得したISO15189に基づくマネジメントシステムを構築するとともに、医療安全の評価指数を向上させる。

3. がん診療ネットワークを構築し、診療体制を充実させるため、1)都道府県がん診療連携拠点病院として、地域のがん診療のサポート体制を強化し、2)外来機能に力点を置いたがん治療センターを充実させ、3)診療科を超えた臓器別チームや緩和ケアチームの活動を活性化し、4)院内がん登録、地域がん登録の精

度を、今期6年間で、がん診療評価に活用可能な水準に高め、その水準を安定的に維持する。

これらの取組を通して、診療がん患者数、がん治療センターの患者数、がん診療地域連携クリニックパス数、外来／入院がん化学療法比率、診療科を超えた臓器別診療の実施、緩和ケアチームの活動及びがん登録の実績増に繋げる。【44】

- 1)がん相談窓口件数の更なる増加を目指し、検診受診率向上のための方策を策定する。
- 2)新規のレジメン登録及びがん診療を推進し、がん診療専門医の育成を図る。
- 3)遠隔操作型内視鏡外科手術装置(ダヴィンチ)による手術を含めた内視鏡外科手術に関する教育及び診療の向上に取り組む。さらに、がん治療に関する多施設共同臨床研究について症例登録数を増加させる。
- 4)がん治療センターの運用について改善点や課題を検証し、見直しを図る。

4. トリアージ(大災害時等における治療の優先順位)訓練に主眼を置いた院内防災訓練の充実やDMAT(概ね災害発生後48時間以内に活動できる機動性をもつ、専門的な訓練を受けた災害派遣医療チーム)訓練への参加を推進する。【45】

- 1)大規模災害訓練、トリアージ訓練、招集訓練等を行い、病院スタッフの災害に対する意識を高め、災害医療に関する技能を修得させる。
- 2)既存のDMATチームを技能維持研修等の訓練に参加させる。
- 3)災害・救急医療学講座と協働し、院内の災害医療体制の強化を図るとともに、災害マニュアルの改訂を行う。

5. 先端医療学推進センターやネットワークの充実を通じて医療の進歩、社会情勢の変化及び患者ニーズの多様化等医療を取り巻く環境の変化に対応した病院再開発を目指す。【46】
新病棟建設工事(再開発第1ステージ)を行うとともに、附属病院再開発計画(再開発第2・3ステージ)について検討する。

6. 先端医療の確立と研究成果を医療現場へ還元するため、1) 先端医療研究と臨床応用をカップリングし、2) PET事業の拡充・推進、FUS(集束超音波手術装置)による自由診療・臨床研究を推進する。

また、臨床試験センターにおける臨床研究部門と治験部門の業務を拡充し、CKD(慢性腎臓病)ネットワークの活動、臍帯血治療、抗がん剤感受性による個対応治療(より個人に適切に対応する「個の医療」)、慢性呼吸器疾患の治療、人工臓器の実用化への進展、DVT(深部静脈血栓症)予防法の実用化、嚥下・排泄・感覚機能の治療、血球粒度、電気泳動波形データを用いた診断支援システムの開発、細胞移植医療センター(仮称)の設立、がんペプチドワクチンの臨床応用を実現する。【47】

- 1) 先端医療研究と臨床応用をカップリングさせるための臨床研究を推進する。
- 2) 多能性を持った臍帯血幹細胞に関する臨床研究及び臨床応用を推進する。
- 3) 増設した高精度放射線治療装置を稼働させ、高精度放射線治療の症例件数を増加させる。
- 4) FUS治療に関する先進医療及び臨床研究を推進する。
- 5) 臨床試験センターに替わる新たな臨床研究推進組織の充実を図り、高度医療・先進医療や医師主導治験に向けたトランスレーションリサーチの支援等を行う。

7. パートナーシップに基づく地域医療を実践するため、1) 高齢化先進県に即応した療養環境の充実と地域連携並びに、2) 電子カルテ・PACS(医療用画像ネットワーク管理システム)に代表される院内医療情報の電子化をさらに推進し、3) 高知ヘルスシステム(高知県の地域医療を担う病院、診療所が県民の健康の維持・増進のためにパートナーシップを結ぶ地域医療システム)を用いた地域関連病院との情報共有に役立て、4) 検診業務サポート・地域の健康管理などの予防医学、5) 地域関連病院と連携した在宅医療サポートにも貢献する。

このことにより、地域連携数や退院支援件数、さらには検診業

務と在宅医療のサポート実績を向上させるとともに、電子カルテ・PACSを充実する。【48】

- 1) 香北町健康長寿計画の追跡調査を、生活自立維持を目的とした介入研究へ発展させる。
- 2) 本院を含めた高知県内の循環器基幹病院9施設において登録された心筋症患者の追跡調査を行う。
- 3) PACSの利用者を増加させるとともに、運用上の問題点の改善策を策定する。
- 4) 地域関連病院と情報共有を行うシステムの利用拡充を図るとともに、在宅・検診患者の情報等と連携させるシステムを開発し、試行を行う。
- 5) 高知県情報ハイウェイに参画し、県東部・西部の病院とネットワークを構築することによって、講演会及び症例検討会等の相互配信の実用化を図る。
- 6) 高知県内の医師のキャリア形成支援や適正配置等の方策を策定する。

8. 医学から医療学へのパラダイム変化に対応するために、1) 卒前から卒後にかけて、模型(シミュレータ)やソフトウェア、あるいは模擬患者の協力によるシミュレーションを通じた教育を充実し、また、2) 医師・看護師・技師・薬剤師等全ての職種にリカレント教育(社会人教育)、生涯学習の場を提供する。

このために、スキルラボ及び低侵襲手術教育・トレーニングセンター機能をより充実させ、卒後研修医数、リカレント学習受講数、院外啓発活動数の増に繋げる。【49】

- 1) 低侵襲手術教育・トレーニングセンターにおける教育を推進し、内視鏡外科手術チームの構築を図る。
- 2) 高知県による中間評価結果に基づき、指導医・専門医取得及び国内・海外留学の支援内容を改善する。
- 3) 外科、小児科及び産婦人科の専門医取得を促進するため、外科手術教育の充実や小児・乳児診療に関する講習会等を推進する。
- 4) 看護職員の教育並びに外来看護及び周術期看護の充実に関する取組を行うとともに中間評価を行い、改善を図る。
- 5) 薬学実務実習及び薬剤師に対するリカレント教育に関する取組について中間評価を行い、改善を図る。

●●● ATTD2012 YEAR BOOKに論文が掲載されました ●●●



看護部
壬生 季代

今回、国際学会The 6th International Conference on Advanced Technologies & Treatments for Diabetes, ATTD 2013, in Paris, Franceに参加してきました。

YEAR BOOKは国際学会参加者に配布されるもので、学会の案内には、「The 2012 Yearbook will summarize the most important articles in the field of diabetes technology published during the period between July 2011 and June 2012.」「2012年鑑は、2011年7月から2012年6月までの間に発行され、糖尿病テクノロジーの分野で最も重要な論文を要約します。」と書かれています。今回掲載された日本人は私を含め2名でした。以下が掲載された論文です。

Mibu K, Yatabe T, Hanazaki K

Blood glucose control using an artificial pancreas reduces the workload of ICU nurses.

J Artif Organs 15(1):71-76 (2012)

「人工臓器を用いた血糖管理は、ICU看護師の労働負担を軽減する」

【研究内容】集中治療現場の従来の血糖管理法の問題は、低血糖発作の危険と頻回な血糖測定に伴う労働負担であった。この問題点を克服するために、2006年より人工臓器を用いた血糖管理法を導入した。人工臓器を用いた血糖管理は低血糖発作を回避し、厳密な血糖管理とICU看護師の労働負担軽減に有用であった。

初めて書いた英語論文が掲載され、ご指導していただいた先生方に良いご報告ができ大変嬉しく思います。

新任のご挨拶



宜しく御願います
内科(老年病・循環器・神経) 北岡 裕章

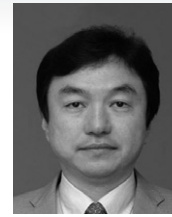
平成25年4月1日付けで、老年病・循環器・神経内科学の教授を拝命しました。何卒宜しく御願います。

私は昭和39年に南国市に生まれ、昭和57年に高知医科大学の5期生として本校に入学しました。そして、卒業後、医師人生の多くを本校で過ごし、その間多くの方々の御指導、薫陶を受け、今日に至りました。この場をお借りして心よりお礼を申し上げたいと思います。

当科は、開設時より第4内科として、小澤利男教授(現名誉教授)、土居義典教授(現名誉教授)の御指導の下に、主に循環器内科、神経内科の診療を担当し、また全国有数の高齢県である高知県において様々な老年医学的アプローチを行ってきました。今後もその方向性を踏襲して参りたいと思っています。

また、進歩の著しい医学の中で、更に専門性を高めると同時に、全人的な医療の行える医療人の育成を行って参りたいと思います。それらを通じ、高知県の医療および附属病院への貢献を図る所存です。

大学卒業後25年が経ちましたが、開学当初を知るものとして、そして現場に實際いる者として、医学部そして附属病院が、現在非常に困難な状況に置かれていることを強く実感しています。この様な時期に、本校の卒業生として、母校に少しでも恩返し出来る立場を頂きました。幸い気心の知れた優秀な医局員に恵まれていることは大きな宝でありますし、応援頂ける同窓生、同門の先生方もいらっしゃいます。附属病院の皆様そして後輩である在校生の皆様の笑顔が見られる様に、微力ながら誠心誠意全力を尽くす所存です。どうぞ宜しく御願致します。



高知大学医学部脳神経外科学講座教授に任ぜられて
脳神経外科 上羽 哲也

本年4月より高知大学医学部脳神経外科学講座教授に任ぜられました。よろしく御願いたします。

昭和63年に京都大学を卒業後、迷わず脳神経外科の戸を叩きました。初期研修ののち大学院にて悪性脳腫瘍の基礎研究を行い、ソーク研究所に留学しFGF-2を制御する遺伝子のクローニングを行いました。当時DNA二重らせん構造でノーベル賞を受賞されたクリック博士がいらっしや、食事をともにした思い出があります。帰国後は、京都大学脳神経外科に勤務し病棟医長を勤め、平成14年より市立岸和田市民病院に勤務し地域医療に邁進しました。大学病院時代は悪性脳腫瘍に対する治療を中心に研鑽してまいりましたが、やはり地域医療においては圧倒的に脳卒中診療が中心であり、手術、リハビリテーションに注力しました。この間に、活性化血小板とメタボリック症候群についてまたMRI画像所見と脳卒中の関係に興味を持ち、原著論文を11編執筆または指導をしました。面白いもので楽しそうに仕事をしておりますと後輩たちも引きずられて執筆を楽しむようになりました。8年間地域医療に邁進しましたが、平成22年10月より京都大学医学部脳神経外科の宮本 享教授のご高配で、福岡大学医学部脳神経外科の井上 亨教授の門下に入りました。福岡では、multimodalityを使用した次世代型の手術開発に携わりました。あっという間の2年半が経ち、高知大学医学部脳神経外科教授に迎えていただきました。

現在、士気の高い若手医局員が在籍しており、微小外科解剖をベースに論理的に思考することにより一例一例を大切にしよう指導しております。結果として日常診療の質が向上すると同時に論文執筆にも繋がる状況を生み出すよう努力してまいります。

今後も、自己研鑽を積み重ね、学生も含め若手の見本となり成長を促すように指導して参りたいと存じます。ご指導ご鞭撻の程よろしく御願申し上げます。

新任のご挨拶



放射線部 技師長 伊東 賢二

1月1日付で下司前技師長の後任として着任致しました。放射線部技師長は私で4代目となります。生れも育ちも高知で、診療放射線技師養成学校の3年間のみ県外で過ごし、卒業と同時に当時の高知医科大学附属病院に採用され現在に至っております。

最近のエピソードにこのような事がありました。平成21年から高知大学大学院に通っていた頃の事、最初の授業で日本人の教授から「Can you speak Japanese?」と聞かれ、一瞬言葉に詰まりました。英語で聞かれたのは初めてでしたが、若い頃東南アジア系の方に間違われ何処のお国の方ですか?とよく聞かれた事を思い出しました。しかしながら、顔を覚えてもらい易いというのはひとつの利点なのかも知れません。

今、放射線技師に求められているのは、医療機器のイノベーションに的確に対応出来る事、常に新しい技術・理論を理解し吸収していく事、それらを業務にフィードバックし、検査・診断、放射線治療を通して診療科・患者さんに提供していく事だと考えております。また厚生労働省医政局から出された「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」の中にも放射線技師の役割が具体的に明記されています。これらを実行し、安全で良質な医療の提供のため部内一丸となって取り組み、研鑽を重ねていく所存ですので、これからも放射線部をよろしくお願い申し上げます。

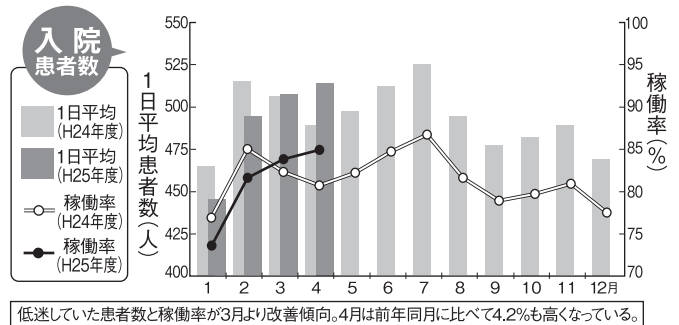
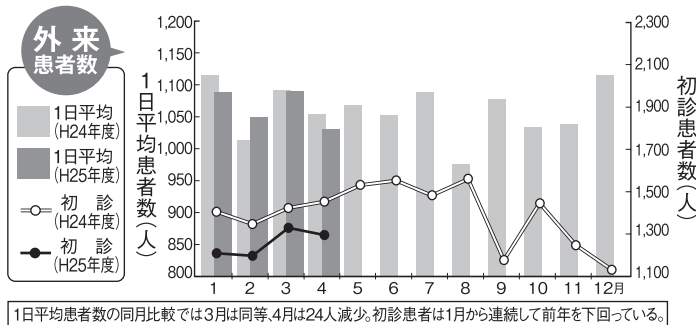


臨床工学部 技士長 村上 武

高知大学医学部附属病院また医学部関係者の皆様、平素より臨床工学部に格別のご高配を賜りまして、誠にありがとうございます。私は臨床工学部の村上武と申します。本年度、4月より前任者である氏原友三郎臨床工学部副部長兼技士長の後任として、臨床工学部技士長に就任させていただきました。しかしながら、私は現在、東京都にあります医薬品医療機器総合機構(PMDA)に出向しておりますため、当部スタッフをはじめ皆様に多大なるご迷惑をおかけ致しますことを深くお詫び申し上げます。

本年度より、臨床工学部は私を含め総勢16名となり、新体制を迎えました。現在は長野文明臨床工学部技士長代理の下、安全かつ有効な医療機器の運用のため、日々業務に励んでおります。私は現在、総合機構にて医療機器審査専門員として、本国内で使用する医療機器の承認審査業務に従事しております。業務としては、臨床に従事しているスタッフと異なる事を行っておりますが、医療機器の性能と安全確保という広義においては違いなく、当部スタッフ共々、同じ方向性を持って頑張っていると自負しております。私は微力非才の身ではございますが、高知大学医学部附属病院に復帰した暁には臨床工学部全員が、これまでの経験を十二分に活かし、今まで以上に附属病院の先端医療と安全な医療の提供に貢献できるものと信じております。最後に文末ではございますが、今後とも臨床工学部が変わらぬご支援・ご指導を賜ります様、心よりお願い申し上げます。

診療状況



編集後記

昨年度一年間、病院ニュース編集委員会委員を務めさせて頂き、今年度は委員長という大役を仰せつかることになった。というよりも、委員長の順番が廻ってきた。常日頃、論文は元より、カルテ、病理組織検査申込書、紹介状の返事などにも可能な限り目を通して文法や用法の誤りを指摘するなど、日本語教育にも力を入れてきた。したがって、愛読書も日本語に関するものが多く、高島俊男氏の「お言葉ですが…」シリーズは週刊誌に連載されていたときは

もちろんのこと、文庫本になってからも幾度となく読み返してきた。先日、あることがきっかけで、高知県出身の直木賞作家から直筆サイン入りの本を頂き、現在睡魔と必死になって戦いながら読んでいるところである。科学論文と小説では当然の如く書き方は異なり、分かりやすく明確な科学論文に慣れ親しんでいるものにとって小説の文章は重たく感じるが、繊細な情景描写には感心した。目を瞑ればその情景が容易に浮かんでくる表現の仕方は、科学論文でも必要で、非常に参考になった。(文責:山本 哲也)